横須賀市長定例記者会見（2024 年５月 24 日）

11 時 00 分～11 時 20 分
横須賀市役所３号館５階　正庁

■案件以外の質疑応答

記者
５月 16 日に原子力空母「ロナルド・レーガン」が、横須賀の地を離れました。市長は 2017 年の市長就任以来、これまで約７年間、日米合同訓練などを通して「ロナルド・レーガン」をすぐそばでご覧になってきたと思います。改めて、「ロナルド・レーガン」の役割や安全性について、どのように評価されますか。

市長
空母出港後にコメントを出しましたが、改めてお伝えさせていただくと、同空母は米国の厳格な基準に基づき、安全・安定的に運用されてきたと認識しています。そして、「ロナルド・レーガン」の乗組員の中には、「ジョージ・ワシントン」に引き続き勤務する方もいると聞いています。アメリカに戻られる乗組員の方には、いつも申し上げていることになりますが、横須賀を第二のふるさとと思っていただきたいと願っています。

記者
５月 20 日に「ニャンぺい」という市民の悩みに答えるチャットボットの公開実験が始まったと伺っています。主な目的としては、不具合を収集して、システムを改善していくことだと認識しています。香川県三豊市は昨年、ごみ分別に関する市民からの問い合わせの対応でＣｈａｔＧＰＴを導入されようとしましたが、正答率があまり伸びず、導入を断念したという経緯があります。今後、もし「ニャンぺい」の正答率が改善された場合、行政サービスや手続きについても、悩みを答えられるようなサービスにしていく予定はありますか。

市長
最終形態は、そこだと思っています。私自身も市役所内部に向けては、まずはＣｈａｔＧＰＴで良いのではないかと思っています。あらゆる悩みや相談ごとに対して、ＡＩで対応できるようになることが一つのゴールだと思っています。少子高齢社会を迎え、職員は今のままでは対応していけないだろうとの考えから、ＤＸを進めています。機械ができることは、できるだけ機械に任せて、ＡＩも使って、職員はできるだけ市民にマンツーマンで寄り添うことができればと思っています。その補完的な意味でぜひＡＩを使っていきたい、そういった時代がくるのではないかと思っています。この「ニャンぺい」は行政サービスだけではなく、あらゆる悩みごとの相談に対応できる、いろいろなことで苦しんでいる方に寄り添うチャットボットを目指しています。引きこもりの方や悩んでいる方に対して、そっと寄り添えるようなロボットができればと思っています。私は鉄腕アトムや鉄人 28 号を見てきた世代ですので、そういったものが人間の身近にあることが私の夢であり、「ニャンぺい」は、その過程にあるとご理解いただければと思います。

記者
香川県三豊市の場合は、正答率が 99％を超えたら導入する予定でしたが、超えることができなかったため、導入を見送りました。本格導入する際の基準となる指標はありますか。

市長
特定の基準は設けていませんが、できる限り正確にしていかなければならないと思っています。正確に答えられるものを目指していかなくてはならない。それを市民と一緒に作っていきたいと思っています。人間と同じで、成功することも失敗することもあるでしょう。より人間らしいということは、100％にすることができないのではないかとも思っていますが、致命的な誤解を与える、迷惑をかけることがないように、できる限り 100％に近づけていきたいと思います。

記者
先月、民間団体が持続可能性自治体の一覧を発表しました。神奈川県内では１市５町が消滅可能性自治体として名指しされています。横須賀市はその中には入っていませんが、これまでの傾向と同じく、若年女性の人口減は、県内の市の中では三浦市と南足柄市に続いて３番目に高い数字が出ています。この民間団体が出しているデータについての所感をお聞かせください。
また、横須賀市が出している人口ビジョンでは、2050 年には人口が約 27 万人となっています。この人口減に対する対策をどのように考えていらっしゃいますでしょうか。
今回のデータについて、地方の首長として島根県の丸山知事は「これは国の問題であって、基礎自治体に責任を負わせられるものではない。東京一極集中を解消しないとどうにもならない」というようなコメントを出されていますが、市長はどのようにお考えでしょうか。

市長
いつも申し上げていることになりますが、地政学的な問題は、非常に大きいと思います。横須賀は、戦前、戦中を通じて色々なところから集まってこられた方たちがまちを作りあげて、その子供たちは残念ながら市外に出て行くという流れがあります。この流れというものは、半島が持っているものと言いますか、歴史が持っているものとして、地政学的には仕方がないことだと思っています。ただ、それを理由にすることはできないので、様々な施策に取り組んで、できる限り多くの方に横須賀市に来ていただきたい。若年女性の人口減への対策として、女性が住みよいまちにしていくような事業や仕掛けづくりもしていますが、なかなか功を奏しておらず、悩み続けています。単純に子育て支援などに傾斜するだけでは、おそらく人口減少に歯止めがかからないと思っています。今でも何ができるかと考え続けていて、総合的にまちの魅力を上げるために音楽・スポーツ・エンターテインメントなど様々な仕掛けづくりをしながら、子育て支援などにも力を入れ、女性も住みよいまちを作っていくということをやり続けるしかないと思っています。その上で、人口減少、若年女性が少なくなっていくということについては、改めて考えていかなければならないし、行政改革にしてもＤＸにしても、そういった状況の中で、取り組んでいきたいと思っています。

記者
国に対しては何かありますか。

市長
ナショナルミニマムとして、子育て支援やある程度の福祉は、全て国がやるべきだと思っています。地域主権者としてずっと言い続けていますが、財政の格差が広がってきて、東京一極集中だと言われている中で、最低限の子育て支援をナショナルミニマムとして積み上げていかなければ、格差が広がっていくだけです。子育て支援と福祉をナショナルミニマムとして積み上げた上で、自治体間で競争をするということではないでしょうか。国に要望するならば、子育て支援と福祉に関しては、ナショナルミニマムとして国が責任をもって負う仕事だということだと思います。

記者
札幌高裁で、３月に同性婚できないことは違憲であるといった判決がありました。横須賀市は、今

年からファミリーシップ制度を導入しました。同性のパートナーがいらっしゃる方も暮らしやすいようにとの取り組みだと思いますが、導入から半年経ちましたが、国が同性婚を認めていない流れを踏まえて、市長の見解をお聞かせください。
また、ジョージ・ワシントンについて、入港時期や今後の予定などわかっていることがあればお聞かせください。

市長
同性婚については、まだ難しい状態で、これから国民的な議論の中で判断されるべきものであると思っています。私はあらゆる差別のない、積極的に全てを認める世界の中で生きてきましたので、同性パートナーだけでない、パートナーシップ制度を作りました。差別のない社会を作っていきたいと考えています。国民の議論も、できる限りそういった方向に進んでいただければ良いなと思っています。
また、ジョージ・ワシントンについては、まだわかっていることはありません。

記者
今、地方自治体に対する国の権限を拡大する地方自治法の改正案が国会に提出されています。一部の自治体からは、地方自治の権限を制限するものになるのではないかとの懸念もでています。市長として今回の法案について、ご見解があれば教えてください。

市長
詳細を存じ上げていませんが、私は地方自治体の権限は、拡大させるべきだと考えています。ただし、その場合は、財源をどうするかということも一緒に考えなければならないと思います。交付税の問題、財源の調整などをどうするかもあわせて考えなければならないので、一様に権限を拡大する、縮小するということは、今のところコメントを差し控えさせていただければと思います。

記者
メタバースヨコスカについて、最近のプレスリリースの多さからも力を入れているところだと思いますが、一市民として、市民側への利益や恩恵が少し感じにくいと思っております。そこで、メタバースヨコスカを経由した観光客が増えている、教育面で効果が出ているといったことがあれば教えてください。

上条副市長
具体的に指標を出していませんが、すでにメタバースヨコスカを訪れていただいた方は10万人を超えています。また、横須賀市が自治体の中で最先端を行っているといったイメージを持っていただけている、プロモーションができていると思います。
現実として、メタバースヨコスカを訪れ、観光として横須賀にお越しいただいた方は、かなり増えていることは、口コミなどから把握しています。その数字がどれくらいかということは、精査する必要がありますが、実際に観光客としてお越しいただいていること、それからメタバースヨコスカに訪れたことで、横須賀のイメージが変わり、横須賀への愛着が上がり、やがて現地に行こうという方は着実に増えていると思います。メタバースヨコスカがきっかけで、横須賀を訪れていただいた方、横須賀のイメージが良くなったと思っていただける方が増えていると思います。今後は、それを市民にも実感していただけるように、効果を検証して皆さんに発表していきたいと考えています。

市長
（記者へ）メタバースはあまり効果がないと思われているのでしょうか。

記者
効果がないというわけではありません。メタバースヨコスカは対外的な施策だと思います。具体的な数字があればより効果がわかるかなと思い、質問いたしました。

市長
メタバースヨコスカはイメージアップ戦略の一つです。
「横須賀はどんなところだろう」とメタバースヨコスカから入る方もいらっしゃるでしょう。そのような方の中で、現実の世界でも、横須賀に行ってみたいと思う方が少なからずいると思います。入口として、メタバースから入ってもよいと思っており、そういう視点があることを市民の皆様にも知っていただきたい。いずれメタバースで展開されている世界が現実になる日が来ると思いますので、市民の皆様には、現実の世界もメタバースの世界も、両方、理解していただければと思います。メタバースによって豊かに、幸せになるといった時代も来るのではないか思います。想像の世界に自分のアバターがいることによって、おそらく、社会的に救われる方もいるでしょう。これからもっと面白い世界になる、今はその過程だと思います。横須賀がその先鞭をつけたいと思います。